

臨地語学研修報告——カイロでの「知のイスラーム化」にかかわる活動——

井上 貴智*

1. はじめに

報告者は、2009年12月10日から2010年3月17日までITPプログラム「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」を利用し、エジプト、カイロにて語学研修をおこなった。語学研修は、ディーワーンという語学学校にておこなわれ、マンツーマン形式で授業を受けた。授業は、語学学校で定められたフスハー（正則アラビア語）での日常会話を中心としたカリキュラムに沿って行われた。当地では、語学研修に加えて、筆者の研究テーマである「知のイスラーム化」についての現地調査も行った。本報告では、滞在中に集中的な調査を行ったIIIT（International Institute of Islamic Thought）のカイロ・オフィスである、Center for Epistemological Studiesでの調査成果について報告を行うことにする。

2. IIIT と Center for Epistemological Studies について

IIIT（International Institute of Islamic Thought）は1981年に設立された組織である。本部はアメリカにあり、支部もヨーロッパ、アジア、中東地域の各地に存在する。IIITの設立にもっとも貢献した人物は、アル＝ファールキーと呼ばれる人物であり、IIITのビジョンや思想に大きく影響を与えている [Stenberg 1996]。アル＝ファールキーは、IIIT設立以前にもアメリカでさまざまな学生組織などで活躍する運動家であり、一方でマレーシアとパキスタンの国際イスラーム大学設立の中心的人物でもあった。また1982年に彼は *Islamization of Knowledge* を出版し、初めて出版物で「知のイスラーム化」という語を提唱した [Faruqi 1982; Abaza 2002]。

Center for Epistemological Studies はカイロ、ザマーレクにオフィスを構えている。オフィスは、IIITの直轄支部という形ではなく、IIITの中心人物とカイロ大の教授によって設立されている私立の機関として始まった。このオフィスでは1995年ムバーラク政権による関係者の逮捕が立て続けに起こるまでは、セミナーや論文の発表が活発に行われていた。現在もIIITの地方支部として機能を果たし、本部と提携しセミナー等を行っている。また、オフィスにはイスラーム関係の蔵書が充実しており、エジプトの学生が集まる場としても貢献している [Abaza 2002]。



図1: Center for Epistemological Studies のロゴ

3. フィールドワーク内容にかんして

(1) オフィス概要

調査はカイロ滞在中の2010年2月におこなった。調査したオフィスはカイロ、ザマーレク地区の中州の北端近くに位置している。閑静な住宅街の中にあるビルの3階にあり、2階にも別のイスラーム系のオフィスが入っていた。オフィスの中はまず入ると受付のスペースがあり、隣には広い

* 京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科

会議スペースがあった。もう一つ部屋があったが、そこは今回入ることができなかった図書室であるとみられる。

オフィスの中には、受付の女性と、センター長のアブドゥルムニーム氏、ヨルダン支部の支部長のマルカーウィー氏、ほかにもう一人の男性がいた。報告者は、このうちマルカーウィー氏から主に聞き取り調査を行った。マルカーウィー氏は、学部では化学を専攻し、修士において心理学、博士では科学教育・科学哲学を専攻しており、多様なアカデミック・バックグラウンドを持っている。

(2) 聞き取り調査の概要——Center for Epistemological Studies の活動内容

現在、このセンターは IIT の思想や活動をエジプトにおいて実践するための組織であり、かつてのようなセンター独自の活動はあまり顕著にはおこなっていない印象を受けた。一方で、IIT との共催で、地元の研究者や学生などに対しトレーニングプログラムや研究会をしばしば開いているとのことである。たとえば、5人から6人ほどのグループで「知のイスラーム化」にかんしグループディスカッションをおこない、考えを深めていくというようなプログラムを実施している。しかし、このようなプログラムや研究会は、センターのほうから IIT の思想を一方向的に教育するようなトップダウン的なものではなく、エジプトの地域の中から出てきた要求に対して IIT の立場からその問題の解決や実現の手助けをする役割を果たしているという。また、このセンターは、他の中東地域の IIT 支部とも協力しつつ、支部のない地域で会議を開くこともおこなっている。次回はアルジェリアで会議が開かれ、「科学の統合」をテーマに議論をおこなう予定であるという。

(3) IIT のもつ「知のイスラーム化」像

マルカーウィー氏への聞き取りからは、報告者の関心である IIT の持つ「知のイスラーム化」のあり方が明らかになった。それによると、「知のイスラーム化」とは、「知の統合」であるということである。「知の統合」とは、以下のようなことである。自然科学にしても社会科学にしても、学問をおこなうには、もととなる状況や物事と、それを捉えるための道具がある。もとになるものは、この世界における万物と啓示の二つに分けられる。捉えるための道具は、理性と直感の二つに分けられる。現在の学問は、理性が万物を捉え、直感で啓示を捉えるという一対一の関係になっている。「知の統合」のポイントはこの一対一の関係をから、他方が他方にも関わることができるようにすることであるという。つまり、理性で世界を捉える営みと、啓示を感覚で捉える営みが全く別の行為であり、個人の中でも、社会の中でも別れているという状況、すなわち学問と信仰が分離している状態を変えていけばいけないということである。

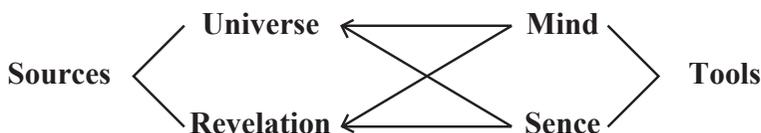


図2：マルカーウィー氏による模式図の再現

さらに、本報告者がこれまで分析してきた「知のイスラーム化」や「科学のイスラーム化」にかかわる議論についてもマルカーウィー氏に尋ねた。とりわけ、そこでは、サイド・ホセイン・ナスル、ジアウッディン・サルダル、オスマン・バカル、アル＝アッタスといった「知のイスラーム化」や「科学のイスラーム化」に関わっている著名な研究者の名前をだし、彼らとの関係性を尋ねた。氏によると、それぞれの論者は、それぞれの学派を形成し活動をおこなっているの、一つになっ

て同じ活動をおこなうということはないものの、みな、イスラームの思想やウンマというものに変革をもたらそうと試みている同志であるとの説明を受けた。実際に、知的交流も盛んにおこなわれているようである。

(4) 調査を終えての今後の展望

今回の調査で、自身の研究にかんし新たに考えなければならない点がいくつか見出された。

まず、IIIT という組織自体が世界各地に大きく展開しているという事実、また、「知のイスラーム化」議論において、最も大規模に活動している組織のうちの一つであるということを改めて思い知らされた。「知のイスラーム化」議論の中での重要性にもかかわらず、本報告者はこれまで IIIT にそれほど注目をしてこなかった。今後、IIIT の組織構造や、現在の活動内容をさらに詳細に精査する必要を痛感した。

つぎに、IIIT が国際展開し、国際ネットワーク化されていることや、各学派間での議論が活発であることなどから、国際的な議論におけるイスラームの固有性に注目する必要があると考えられる。イスラーム地域研究では、特定の地域のイスラームを研究することが主眼となっている。しかし、そこで見落とされるのはイスラームの国際的な議論動向である。特定の地域のイスラームを専門に研究することは、その地域のイスラームを基準として国際的議論をみてしまうことにつながる危険性を秘めている。国際的議論は各地域のイスラームの共有点を束ねたものにすぎないと考えてしまったり、国際的な舞台にあるイスラームは純粹で基準となるべきイスラームであると捉えてしまう可能性もあろう。国際的なイスラームの議論の舞台自体にも、特定の地域におけるイスラームの独自性と同様に、独自性があるのではないか。その場合、国際的なイスラームの議論という場をメタ地域として考えて、その独自性を問う作業が必要不可欠となろう。

参考文献

- Abaza, Mona. 2002. *Debates on Islam and knowledge in Malaysia and Egypt: shifting worlds*. London: Curzon.
- Faruqi (al-), Ismail. 1982. *Islamization of Knowledge*. Herndon, VA: IIIT.
- Stenberg, Leif. 1996. *The Islamization of Science: Four Muslim Positions Developing an Islamic Modernity*. Lund: Novapress.
- International Institute of Islamic Thought. 2010. <http://www.iiit.org/> (4月28日閲覧) .